

交流－羊毛を紡いで、織る－モンゴルのある事例より



海外交流

今岡良子*

Exchange-Spining and weaving wool- A case of Mongolia

Key Words : Mongolia, handicapped, weaving, defective

はじめに

筆者が研究対象としているのは、ロシアと中国の間に位置するモンゴル国である。モンゴルは1990年から社会主義から資本主義に体制変換し、現在は、日本との間で、政治、行政、軍事、企業、学術、教育、文化、市民、様々なレベルの交流が行われている。このコラムでは、筆者がこの夏に経験した1つの交流を紹介したい。

(1) zoomを使った交流型の研究会

1970年に大阪外大で発足したモンゴル研究会は、毎週大学に集まり、勉強会を重ねてきたが、コロナ禍の下、オンラインで実施するようになった。すると、日本各地のモンゴル研究者、モンゴルと交流している市民、そして、モンゴル国からも参加する研究会になった。

2020年8月の研究会は、モンゴルの障がい児を支援してきた医師とウランバートル市の貧困地域のまちづくりの活動と研究をする阪大院生が共同企画し、「誰一人取り残さない、支え合う地域づくりに向けて：障がい児・者への地域社会サービスの充実を目指す市民団体の取り組み」というテーマで開催された。

参加者は、モンゴルから障がい児親の会、リハビリセンター職員、日本から医師、看護師、保育士、

また、ウランバートル市トルゴイトまちづくりセンター職員、その日本側のカウンターパートのNPOメンバーが集まった。

モンゴル国政府は、Covid19の感染拡大を抑え込むため、2月から国境を閉鎖し、経済活動を制限していたため、この時、障がい者が集まって、リハビリを行うこともできなくなっていた。日本側からは、家庭でできる様々な技術を紹介し、モンゴル語と日本語がzoom上を飛び交った。

(2) Saoriに取り組むことで生まれた課題

この研究会には、Saori織りの大阪本部の代表らも参加していた。2019年に1か月間、トルゴイトまちづくりセンターの職員Zさんが招待され、Saori織りの研修を受けた。帰国後、レッスン拠点を作ると大変な評判となり、障がい児の親の会から依頼され、出張レッスンもするようになった。すると、直接織り機を購入し、自宅で1日中作品作りをしたいという障がい者も出てきた。また、障がい者センターから職員Mさんが研修を受けるため、日本に渡航する準備を始めたところ、コロナ禍で渡航できないでいた。

このため研究会の後半はSaori織りに関する質問が続いた。「織り始めると、すぐに糸がなくなる」、「中国が羊毛を大量に買うので、洗毛の値段が上がり、紡績糸が高くて買えなくなった」、「どうすれば、織る技術を向上させることができるのか?」、「どうすれば、障がい者が織物を作って、経済的な自立をすることができるか?」

順調に通訳していた筆者は、このあたりから、言葉を詰まらせた。モンゴルには、Saoriの織り機があり、織る技術は習得し、すでに布を織ることはできている。しかし、Saori織りの思想が伝わっていない。zoomを通じて数時間の話し合いで伝えられ



* Ryoko IMAOKA

1962年8月生まれ
国立大学法人大阪外国語大学大学院
(1988年)
現在、国立大学法人大阪大学
言語文化研究科 准教授 文学修士
専門/遊牧地域論
TEL : 080-4492-7117
E-mail : imaoka@lang.osaka-u.ac.jp

るだろうか？¹

(3) キズモノ

ここで少し横道に逸れて、織り機の話をしたい。織り機は、経糸が垂直に交差する緯糸を上下に挟み、その摩擦で糸を固定し、布を作る機械である。その原理は、旧石器時代に成立している。ご存知のように、1733年にジョン・ケイが緯糸をシャトルに乗せた「飛び杼」を考え出し、機織りを高速化する。するとすぐに経糸や横糸が足りなくなり、1764年にハーグリーブスが8本の糸を同時に紡ぐジェニー紡績機を考え出した。1771年にアークライトが水力を使って糸を紡ぐことに成功した。その後、織り機は様々な改良が行われ、水力から蒸気が変わり、手織り機から自動織機に変わる。日本では豊田佐吉が、自動織機を改良した。² そのポイントは、キズモノを出さないこと。織り機が高速で織ると、経糸や緯糸がすぐに無くなる、途中で切れるという事故が起こる。経糸がたった一本抜けても、それは商品としてはキズモノになる。豊田佐吉は、糸が無くなったことを察知する仕掛けを考え出した。キズモノを出さず、能率的に、大量生産を続けるというシステムを作ったのである。それは1896年のことである。

1968年、ところは大阪で、手織りを愛する城みさをが足踏み式のSaoriの織機を作りだした。³ 経糸が抜けた織物をキズモノとは見ず、個性と見る。世界でたった一つの作品を織る。それが城みさをの考え方で、同じ規格、同じ質のものを大量に生み出し、経済を発展させてきた織り機の進化の歴史とは逆行する。しかし、買う人のための織り機ではなく、織り手自身の心を表現する織り機であった。筆者も、Saori織りの思想に興味を持ち、手織りを始めて3年になる。

(4) 外国の基準

モンゴルでは、遊牧によって家畜を飼う牧畜が現

在も行われている。その畜産物は、衣食住の必要を満たしてきた。羊毛を紡いで、その糸で織物を作るより、フェルトを作り、天幕(ゲル)を覆う断熱材として利用してきた。家畜を太らせて中国の絹と交換してきたので、織物工業は育たなかった。社会主義の時代になると、モンゴルからソ連・東欧へ、畜産物原料を輸出し、重工業品が輸入されるようになった。特に、羊毛は軍服の材料に、皮は軍靴やベルトになり、冷戦時代のソ連の軍需の一部を支えた。また、ソ連・東欧の援助により、洗毛工場や紡績・織物・フェルト工場が建設された。工場には、ものづくりの楽しさ、創意工夫は生まれず、むしろ、ソ連・東欧が求める基準と量を満たし、計画経済のノルマを果たすため、一心に働く労働者の姿があった。

1977年には日本政府は、戦後賠償として、モンゴルにカシミア工場を建設した。これは、モンゴルの山羊のカシミアにあった機械設備を導入したため、社会主義時代にドル箱と呼ばれるほど成功したODAの事例となっている。そして、現在も、カシミア製品は、重要な貿易産品となっている。

カシミアというのは、モンゴルではモンゴル山羊の産毛のことで、その細さは13-16.5マイクロ⁴である。羊毛の中で最も細いのが、オーストラリアのメリノ種の毛で、15.0-22.04マイクロ⁵。モンゴル羊の場合、産毛が24.9マイクロ、外毛が96.1マイクロになる。⁶ この外毛とは、本来羊に生えていたもので、合羽のように雨を弾く硬い毛のことである。メリノ種の羊は、外毛が生えないように改良され、温帯で飼われてきた。メリノ種の羊毛を頂点とする羊毛の分類では、産毛と外毛が混ざった状態のモンゴル羊毛は、「太毛」と分類される。遊牧の暮らしに欠かせないモンゴル羊の毛は、外国にとっては、軍服には適しても、高級な背広の生地には適さないと評価を与えられるようになった。

(5) 心を解き放って考える

キズモノを個性と考える城みさををなら、彼女らが訴える問題点にどう答えるだろうか。そう考え、解説を加えながら、通訳を続けた。

¹ Saori 織り機の使い方

<https://www.youtube.com/watch?v=b5xDH0FFB8Q>

² 名古屋市のトヨタ産業技術記念館には豊田佐吉の改良した織り機が展示されている。実際の織り機の動きを見ると、理解しやすい。

³ Saori 本部は、大阪市桜ノ宮にある。実際にSaori 織りを経験すると、その思想も理解しやすい。

<http://www.saori.co.jp/>

⁴ Д.Батбаяр, Ноосны анхан шатны боловсруулалтын технологи, Уланбаатар, 2019, P.16

⁵ 前掲書, P.36

⁶ 前掲書, P.77

「糸がすぐなくなる」ことに対し、「糸は工場にあるのではなく、モンゴルの田舎にたくさんある。」と言うと「ああ、田舎に行くと、遊牧民は羊毛をタダでくれるわね」「糸は羊毛を紡げばいい。均一でなくても、その糸は、織った時に表情のある生地になりますよ。」「Saori機の部品を手紡ぎ糸が使えるようにカスタマイズできますか?」「はい」

「洗毛の値段が上がった」ことに対し、「羊毛は自分で洗えばいい。」と言うと「じゃあ、セーター用の洗剤で洗えばいいんだわ」「そう、たらいが2、3つあれば、羊毛1kgぐらい洗うことができます。」

「織る技術の向上」というのは、「心のままに織ればいい。こうしなければならない、ということは何もない。」と言うと「子どものように遊べばいいということね。」「そう、世界で1つの織物を楽しんで創る。」

日本に研修に来る予定だったMさんが「そういえば、障がい者の作品を見せると、健常者が『端が、

まっすぐなればいいね』と言いました。そもそも言われた通りできない障がい者に「こうあるべき」と指導するのは無理を強いることです。だから、私たちもビジネスに結びつけて、基準に合うものを作らせてはいけないってことですね。」「確かに、知的障がい者は、教育を受けていない分、こうしなければならないと思っていないので、健常者より自由に表現します。Saori織りは、布を織る機械ではなく、心を自由に解き放つための道具なのです。」思わずガッツポーズをした瞬間であった。

おわりに

Saori織りは、教えないで、コミュニケーションをとりながら、相手の本来持っている力を引き出すことによって、伝えていく。8月の交流をここにまとめながら、この言葉を来年度の授業でも実践してみようと思った。

